

(そのうち、俺はこの男に抱き殺されそうな気がする……)

ぐったりとベッドに身体を預けた嵐士は、涼しい顔で自分の頭を撫でる男を、睨みつけた。「なんだ。まだ足りないのか？」

口元を釣り上げたニヒルな笑みが恐ろしいほど似合う男——蘇我幹也——が掠れた甘い声で囁きかけてくる。だが、嵐士はそれに答えることなく、ふいと顔を背けた。

そんなわけがあるかと怒鳴り返したいところだが、そう言ってしまうえば、怒鳴る体力が残っていると判断され、もう一度襲われかねない。かといって冷静に無理だと返しても、まだぐずぐずと綻んだままの下肢を刺激され、無理じゃないと身体で教えられる可能性もある。

悲しいことに、どちらのパターンも経験済みだからこそ、樋口嵐士は無視という新しいパターンの拒否方法を試みた。

(本気で、この人の体力はシャレにならないんだって)

元々殺陣師を志しており、殺陣師兼役者という経験を経てきた蘇我の体力は、はつきり言うて底なしだと思っ。役者を引退し、指導側に専念するようになったことで、有り余った体力がすべて性欲になったのではないかとさえ思うほど、蘇我の抱き方は激しい。

嵐士の仕事に支障が出るような抱き方はしない、という蘇我自らが決めたルールは守られているものの、次の日がオフだと分かっているときの蘇我は容赦がない。たまにはオフを教えずに静かに過ごしたいと思っても、嵐士のスケジュールの大半は蘇我に知られてしまっている。

自分の恋人とマネージャーが顔見知りというのも考えものだと、嵐士は息を吐いた。

蘇我と正式に同居するにあたり、蘇我と付き合っていることは隠すにしても、嵐士がどこに住むかは事務所に連絡する必要がある。そのため、嵐士は蘇我と共にマネージャーに同居する件を相談していた。

嵐士は殺陣のセンスがよく、磨けば光る。所属劇団は違っても、同居していれば殺陣指導できる機会が作りやすい。それに、今度さらに知名度を上げていくであろう芸能人が、すぐに居住できる住居を見つければ難しいだろう。ならば、このまま同居を続けた方が、嵐士は仕事に専念できるはずだ。

などと、主に蘇我が並び立てた理由をマネージャーは疑うことなく納得したらしい。元々、一時的とはいえ同居していた事もあり、マネージャーは蘇我との同居に同意してくれた。

だが、やはり別々に住んでも良かったのではないかと、この頃少し思う。

恋人同士なのだから、嵐士としても蘇我と過ごす時間が嬉しくないわけではない。抱かれる事だって、嵐士が本気で拒絶したことは一度もない。

(でもさ、常に負けてる気分ってかなり悔しいんだけど)

殺陣はもちろん、役者としても、自分はまだまだ未熟者。だからこそ、自分はまだ蘇我に通

わない。それは理解しているつもりだ。

だが、こうやって体力の限界まで抱かれた後にまだ余力を残している蘇我を見ると、どうしようもなく負けた気分になる。

無駄のない筋肉で整えられた身体つきや、軽々と自分を持ち上げる膂力。体力面だけでなく、とにかく男として負けている気がする。

(俺も、サボってるつもりはないんだけどな……)

舞台役者で在り続けるため、体力づくりのランニング、筋肉トレーニング、発声など、どれも嵐士は日課として続けている。

それなのに、鍛え方が足りないのか、それとも体質なのか。全体的にバランス良く筋肉はついているものの、身体のラインはどちらかというところと細身で、蘇我の体型とは似ても似つかない。

がっしりとした筋肉がついている蘇我の腕を見て、ため息が漏れた。

「もう少し、筋トレとか増やすかな……」

「何かと思えば、随分と色気のない事を言ってくれるじゃないか」

「ちよつ、なに……、うわっ！」

無理矢理蘇我の方を向かされたと思うと、そのまま引っ張りあげられた。蘇我の身体の上で寝るような体勢にされ、互いに何も身につけていない肌が触れ合う感触と、熱い胸板に頬が触れ、どくと胸が跳ねる。

「ちよつ、離してもらえませんか」

「余計なことを考えているおまえが悪い」

逃さないと言っても言うように抱きしめられ、一層身体が熱くなる。

蘇我の事しか考えてない、なんて言えるはずもなく、嵐士は諦めたように息を吐いた。

「重くないんですか……?」

「軽すぎるぐらいだ」

きっぱりと返され、たった今考えていた事を見透かされたようで、思わず唇を噛む。

「どうせ俺はまだまだですよ。……って、何触ってんですか！」

諦めて油断していた身体を蘇我の手が怪しく撫で、おまけにまだ後始末をしていない濡れたままの足の間を刺激され、思わず腰を浮かせる。

「まだ満足してないようだからな。もう一回挿れてやろうか」

「冗談じゃないですよ。ちよつと、触らないでください」

不埒に嵐士の身体を撫でる手を叩いて止める。だが、そんな些細な抵抗は蘇我にしてみれば、じゃれつかれているようなものなのか。嵐士の抵抗を受けながらも、蘇我は口元を釣り上げて笑うだけだ。

「それで、筋トレがどうこう言ってたのはなんの話だ？」

「別に、大したことじゃありませんよ。いつまでも蘇我さんに好き勝手されるのは癪ですから、

もう少し鍛えてみようかと思っただけです」

これ以上触らないでくださいと身を振ると、押さえるようにさらに強く抱きしめられる。

「嵐士が多少鍛えたぐらいで立場が変わるとは思えないがな」

「……馬鹿にしてるんですか」

思わず拗ねた声で返してしまうと、蘇我は小さく笑いながら嵐士の背中を軽く叩く。子供を宥めるような手つきに腹が立つものの、その心地よさについて抵抗を忘れてしまう。

「……本当は、殺陣だってもっと演じてみたいんです。鍛えておくに越したことはないじゃないですか」

「セックスの後に殺陣の話か？ 相変わらずの役者馬鹿だ」

もう一度笑われ、嵐士はむっと口を閉じた。

馬鹿の一つ覚えと言われようと、嵐士にとっては舞台が第一だ。エンカウト公演以降、また殺陣ができるような仕事は入っていない。舞台上で殺陣を演じた興奮がまだこの身体に残っている嵐士にとっては、もう一度殺陣を演じる機会が欲しくてたまらないと言うのに。

「悪いことは言わない。必要以上に鍛えるのは止めておけ」

「なんでですか」

「おまえは、殺陣だけを演じる役者じゃないだろ」

蘇我の言いたいことが分からず顔を上げると、優しい目をした蘇我に見つめられた。

「舞台上でダンスのシーンもあるだろう。ある程度身体のラインを絞った方が舞台映えもする。

テレビでの仕事も多いおまえが、無理に体型を変えようとする必要はない」

「それは、分かりますけど……」

「分かっているなら、今は一つに捉われるような鍛え方をするな」

優しくも厳しい声音で窘められ、嵐士は口を閉じる。

蘇我の言うように、体格が良すぎることや、長身を理由に役の幅が狭まることは多々ある。

特にテレビ関係の仕事だと、画面映えのする外見が要求されることが多い。結局、標準より多少引き締まっている程度の体格が、一番仕事を受けやすいというのは、嵐士も分かっている。

だが、それではいつまで経っても自分が蘇我に敵うような殺陣ができる日が来ない気がしてしまう。蘇我に勝ちたい、という定義の定かではない目標は、恋人となった今でも嵐士の胸に残ったままだ。

「無理に鍛えたりはしませんよ。でも、殺陣の練習はちゃんと続けますよ。同じ舞台上で共演はできなくても、蘇我さんと対等に演じられるぐらいの殺陣をできるようにしたいって気持ちには変わりませんから」

勝ち逃げとかなしないでくださいよ、と呟きながら、駄々をこねているような恥ずかしさで思わず蘇我の胸に顔を隠す。

嵐士が何を言ったところで、おそらく蘇我が自分自身の意志以外で役者に戻ることはないだ

ろう。それは、まだ短い付き合いの中でも十分に理解できた。

それでも、嵐士の中ではいつまでも蘇我は目指すべき目標であり、自分をここまで成長させてくれた大きな存在だ。少しでも、彼に近づきたい想いは、おそらく嵐士の中から消えることはない。

「おまえは本当に……、馬鹿すぎて困る」

「はあ？ って、ちよつとどこ触って……」

「煽ったおまえが悪い」

唐突に萎えているものを強い力で握られ、弱い先端を指先で刺激される。あからさまに嵐士の身体を再燃させようとする刺激に、あわてて身体を起こすと、すぐにベッドに押し倒された。

「んっ、……ん、あ」

逃がさないように押さえつけられながら、深く口付けられる。逃げようとする舌を絡めとられ、濡れた音がたつほど激しいキスをされる。その間も、蘇我の手は嵐士の熱を刺激し続け、軽く勃ちはじめた自身に気づき、嵐士は頭を降ってキスから逃げた。

「ちよつ、本気なんですか？」

「言ったはずだ。煽ったのはおまえだと」

いつ、どこで自分が蘇我を煽ったというのか。声さえも奪うように再び唇を塞がれ、嵐士の抵抗とは裏腹に、刺激され続けた下肢がうずき始める。

すると、蘇我は抵抗していた嵐士の手を掴み、蘇我自身の熱に触れさせた。驚く嵐士の耳元で蘇我は「俺に余裕があると思うか？」と囁く。

「余裕がないから無茶な抱き方しかできないんだろが」

「蘇我さ、ん……、あっ」

「他のことを考える余裕も無くすぐらい抱き潰してやらないと、おまえはすぐ他の目標を見つけてどこかへ行きそうだからな」

「まって、やっ……」

蘇我の手で勃ちあがったそのこと蘇我の熱を重ねられ、蘇我の手の中でぐちゅぐちゅと濡れた音を立てる。蘇我の言葉をちゃんと聞きたいのに、すでに何度も抱かれている身体に新たな刺激は強すぎて、何も考えられなくなっていく。

「おまえは、そうやって俺を追い続ければいい」

「や、やめっ……、あっ、ああ」

再びうずきはじめてたところにまで指を入れられ、もう何一つ抵抗できず蘇我の与える快感に溺れる。

結局なにか一つ敵うことないままだと諦め、嵐士は蘇我の背中に腕を回した。